
Rast Means

黒樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a s t M e a n s

【Nコード】

N 1 2 2 2 C

【作者名】

黒樹

【あらすじ】

人間が潜在的に持つ強力な力R a s t M e a n s、略してアール。このアールを操る者達の国家を世代を宇宙を超えた戦いを紐解いた物語。

第0章 プロローグ

R a s t
M e a n s

正しいスペルはL a s t
M e a n s

理由は不明だが、スペルミスは訂正されなのままそれは広まった

R a s t
M e a n s

それは人間が持つ底知れぬ力

最後の手段

人間はどこから来たのか

なんのために生きているのか

古来より人間が追求してきたテーマ

R a s t
M e a n s

それはこの永遠のファンタジーを彩る力

あなたも何か、力を秘めているかもしれない

険しい山脈に囲まれた高原。

ビューと風が吹けば、草がざわめき、高原に立っている二人の男の髪がなびいた。

一人は炎をまとった赤い剣を、一人は禍々しいオーラをまとった黒い剣を構え、向き合っている。

赤い剣を持つのは、赤い髪をした少年。

黒い剣を持つのは、鉄色くろかねの髪をした青年。

風がやんだ。

空気がピリピリと張り詰め、まさに一色触発である。

「どうした？どこから来ても構わないよ。」

「それとも、今になって怖気づいたのかな？」
青年が微笑をたたえながら、挑発する。

すると、少年がつぶやくように答えた。

「ああ、怖いさ。あんたが怖いよ。」

「でも、ここで死ぬ気はさらさらないね。」

「世界征服を果たすまでは……。」

第0章 プロローグ（後書き）

初めまして、黒樹です。

いやー、始まってしまいましたラスミン（笑）

ゆっくり更新していくつもりなので、気長に読んでくだされば幸いです。

第1章 始まりと日常

ここはアードガルス連合共和国。四方を海で囲まれ、南西の一部だけが大国ヴァンナー連邦と接している。国土はそれほど大きくないものの各種産業が発達しており、この世界では先進国のひとつに数え上げられる。

その東部に位置するアールヴ地方の都市サントブルグの郊外にあるのが、ルノーブルという小さな町である。このルノーブルは、田園風景がかもし出すなのどかな雰囲気にも包まれた町だが、そのなかにひととき目立つ邸宅が建っている。

広大な土地に建つその邸宅には、門から70メートル程の私道が走り、玄関先にはロータリーがある。ロータリーの中央には立派な噴水があり、鯉をモチーフにした家紋が入っている。シンメトリーに作られた邸宅はヨーロッパの貴族の館を髣髴とさせる立派なものだ。

さて、時刻は朝。この高貴な香りのする邸宅から、あまり高貴とはいえないやり取りが聞こえてきた。

二階のとある部屋のドアの前で、若い女性がなかに向かつて呼びかけている。格好からして、この家の召使のようだ。

「デ-ion様。朝でございます。お目覚めの時間でございますよ。」

若い女性の声が響く。

「デ-ion様。起きてくださいませー。」
返事はない。

と、一階からきれいな格好をした女性があがってきた。長い髪の壮年の女性だ。

「いいわムニン。私に任せてちょうだい。」

「はい、奥様。」

今度は女性が呼びかける。

「デ-ion。起きて。フギンが美味しい朝食を作ってくれたわよ。」
返事はない。

「そういえば、今日は学校に軍の方がみえてお話してくださるんですよ？遅刻したらまずいわよねえ。」

すると中からバタバタと音が聞こえ、すぐにドアがバンと開いた。「忘れてた！そういや昨日ブーリのじじいがそんなこと言ってたっけ。」

部屋から現れた赤い髪の少年は、そう言つと急いで一階に降りていった。

女性こと母リーフと召使ことムニンは顔を見合わせてクスリと笑った。

ここは邸宅一階の食堂。庭に面する大きな窓があり、壁には高そうな絵画が飾られている。30人は座れるであろう縦に長いテーブルがあり、上座には黒髪の厳格そうな壮年男性が座って新聞を読んでいる。壮年男性から向かって右には立派な白髭をたくわえた老人、左には赤い髪の少年が座ってテレビを見ながら朝食をとっている。今日の朝食は焼きたてのクロワッサンと目玉焼き、サラダに紅茶だ。

「父さん、兄貴は？」

赤い髪の少年ことディオオンが、黒髪の壮年男性こと父スルトに聞いた。

「もうとっくに出かけた。どこかの学生と違って、軍人は忙しいのでな。」

どこかを強調されたことでむかついたのか、ディオオンが反論する。「じゃあ、ゆっくり新聞読んでる父さんは、軍人のくせにどこかの学生といっしょだね。」

「ディオオン。朝から怒鳴られたいのか？」
スルトは新聞を握り締め、眉をびくびくさせながらディオオンを見る。

「まあまあ、朝のリラックスタイムに喧嘩はよくないのう。学生だって軍人と同じくらい忙しいんじゃ。のう？ディオオン。」

白髭の老人こと祖父のアウドムは、微笑みながらディオオンにウィンクした。

「さつすがじいちゃん。よくわかっていらつしやる。」

ディオンの口を笑ってウィンを返す。

「父さん。あまりディオンを甘やかさないで下さい。」

「わしゃ甘やかしてなどおらんよ？可愛がつてるんじゃ。」

ニコニコしているアウドムを尻目に、スルトはため息をつきながら新聞に目を戻した。

『次のニュースです。昨日深夜2時ころ、ベルハラ郊外で犯罪組織どうしの抗争が発生しました。この抗争により組員と見られる男3人が死亡した模様です。この事件による民間人の被害はないとのことです。この事件にかかわった組織はまだ判明しておりません。軍関係者は・・・』

「最近は何騒じやのう。」

「またサーペントの仕業か？」

ディオンの口がスルトに尋ねる。

「それは教えることはできん。たとえ家族でもな。」

「そう言つとスルトは紅茶を一口飲んだ。」

「んだよ、けちだなあ。じゃあさ、これは教えてくれよ。最近いろんな事件にサーペントがかかわつて聞けど、結局サーペントってなんなんだよ？」

スルトはまた一口紅茶を飲むと、口を開いた。

「まあ、いいだろう。これから軍人を目指すなら知っておいた方がいい。ただし、誰にも口外するな。いいな？」

ディオンはうんうんと縦に2回うなずいた。

「サーペントは犯罪組織だ。それはディオンの口も知ってるな？だがな、おそらくお前が思っているよりももっと大きな組織だ。」

「もっと大きいって、アイフマぐらいか？」

「たしかにアイフマは世界規模の犯罪組織だ。だが、その規模はある程度の予測がつく。一方サーペントは、規模の予測がつかんだ。」

「それって、つまりどういうことだ？」

「アイフマの場合は、中枢部の組員の把握が大方できている。しかし、サーペントは中枢部が誰一人として特定できていない。表に出ているのは下級構成員と、エージェントと呼ばれる特殊戦闘員だけだ。まあ、このエージェントはかなりの戦闘能力をもっていてな、軍も手を焼いている。そして、エージェントの上に8人の幹部が存在しているというが、確認はできていない。犯す犯罪も、殺人、強姦、誘拐、強盗、詐欺、密輸、密売と脈絡がないので、組織の目的もよくわからん。世界各地でその活動が報告されていることから、アイフマと同じ、もしくはそれをしのぐほどの規模をもつと考えられている。」

「それだけいろんなことやってんなら、指導者に見当はついてんじやないのか？」

と、スルトは一瞬口をつぐむが、小さく一言つぶやいた。

「それ以上は教えられん。」

「(っってことは、だいたい見当はついてんだな。)」

「わかったよ父さん。教えてくれて、ありがとうございました。」

妙に素直なディオオンに調子を崩したのか、スルトはああと一言返事をすると、再び新聞に目を戻した。

「さてディオオン。忙しい学生はそろそろ学校に行く時間じゃぞ。」

「おっと、いけね。」

ディオオンは残りのクロワツサンを一気に口に入れて立ち上がる。

「じゃあ行ってきます。ゲリ、車を出してくれ。」

スルトとアウドムに頭を下げると、そばに立っている黒サングラスに黒いスーツの男に声をかけ、慌しく食堂を出て行った。

東の都、サンクトブルグにある国立アウクス軍事学校。今年で創立60周年を迎える最難関名門軍事学校である。6歳で入学し、小等部3年、中等部3年、高等部3年の計9年をかけてこちらの世界での高等学校卒業レベルの学習及び士官学校卒業レベルのカリキュラムを修了する、まさにエリートを育てる学校である。

この名高い学校の校門に一台の黒塗りの車が停まった。運転席から、これまた黒尽くめの男が現れて、後部座席のドアを開けた。

「ディオン様、到着いたしました。」

すると、ドアが開くなりディオンは弾丸のように飛び出し、いつてきまゝすと言いながら走っていった。

「いつてらっしゃいませ。」

黒尽くめの男こと召使ゲリは、丁寧にお辞儀をした。

ところ変わってここは2号館3階高等部アル科3年A組の教室。教室に向かって、ドタバタと足音が近づいてくる。足音が止み、教室のドアが勢い良く開いた。

「間に合った〜！セーフ。」

はあはあと息を切らしながらディオンは席につく。

「お、元帥の息子の到着だ。運転手つきの車で来てなのに遅刻ギリギリかよ。」

少し背の高い少年がこちらにやってきて、ディオンの前のイスにこちら向きに座った。

「トール、元帥の息子はやめろって言ったろ。それに、運転手が安全運転つって全然とばしくれないんだよ。」

ディオンはそう言いながら、トールの後ろで1つ結びにした茶髪を引っ張る。

「わかったわかったから、髪を引っ張んな。」

二人がバトルを繰り広げていると、

「なに朝からじゃれあつてんの？」

ディオンの隣の席から金髪の少女が声をかけてきた。

「じゃれあつてねえよ。こいつが禁句を言ったから罰を与えてるだけ。」

ディオンは髪を引っ張るのをやめてそちらに向き直る。

「そういえば、今日は軍から將軍が来て話するんでしょ？なんでも史上最年少で准将になった人らしいよ。」

「なんだよエヴン、もしかしてちよつと楽しみにしちゃったりしてるわけ？」

「もしかしてもなにもそうに決まってるじゃない。ディオンは女の子がなんたるかを全然分かってないなあ。その准将、聞く所によると28歳らしいよ。28歳で准将なんて、そうとう優秀じゃないとなれないし。きっとあんたたちみたいながキと違って、できる大人の魅力漂う紳士なのよ。」

目を輝かせながら語るエヴンに、二人はあきれながらため息をついた。

すると、教室のドアが開いて、分厚い眼鏡をかけた男が入ってきた。

男は教壇に上がり、教卓に手をつく。

「はいはい、みなさん席についてくださいね。」
その一声でざわついていた教室が静かになった。

「はい、おはようございます。今日は、アールヴ司令部からボルヘイムダル准将がお見えになって、みなさんにお話をしてくださいます。そしてお話の後に、アール科の学生同士の練習試合をご見学されたいとのことです。」

練習試合という言葉聞いた生徒達は一瞬にしてざわめき始めた。

「はいはい！ファビウス先生！練習試合って武器使っていないの？」

「はい、みなさん静かに。ディオソ君、いまから説明しますから質問は後にして下さい。」

ファビウスは生徒達を静めると説明を始めた。

「はい、場所は学校の第一訓練場で行います。試合はトーナメント方式。私ファビウスが審判を務めます。ルールですが、武器は訓練用のものを使用してください。はい。あとは実戦ながら、自由に行ってください。危険になる前に私が止めに入りますし救護班も待機しているので、安心して全力で戦ってください。はい、以上にか質問はありますか？」

はいとアールが手を上げた。

「はい、アール君。」

「あの、優勝するとなにかあるんですか？」

「はい、特になにかあるわけでもありませんが、軍関係者が観戦していらつしゃいますので、将来のためのアピールになるでしょう。」
ファビウスは眼鏡を上げながら答えた。

「はい、他に質問はありますか？」

教室はシーンとしている。

「はい、なければ、ボル准将がお越しになるまでまだ時間がありますので、アールについて基本的なことを復習しましょう。」

とたんに教室はブーイングの嵐に包まれた。

「はい、今文句を言った人、アール科で5はあげませんよ。」
途端に教室が静まり返る。

「おほん、いいでしょう。はい、まず、アールの正式名称は」

「Rast Means!」

「はい、そうですねデイオン君。これは最後の手段、Last Meansのスペルミスだと言われています。が、何故スペルミスのま広まったのかはよく分かっています。とにかくRast Meansだから略してアールということになっています。はい。アールは人間なら誰もが持っている不思議な力ですが、いつも使えるわけではありません。最後の手段という名前からも想像できるように、緊急時に無意識のうちに発揮される力です。しかし、一部の人間は訓練をすることにより恒常的に力を発揮することが可能となります。それがあなたたちですね。」

生徒達は心なしか誇らしげだ。

「はい、アールには創造と付与という二つの能力があります。創造とは、新たなものをアールによって形作る能力です。付与とは、この世に存在するものに力を与えることです。・・・と、これだけでは抽象的過ぎてよくわからないと思います。が、今すべてを理解する必要はありません。おおまかに概念をつかんでおけばOKです。はい。そしてここからさらに複雑になるのですが、アールには、木、火、土、金、水、の5つの属性があります。この5つの属性には陽と陰の関係があります。木は火を生み、火は土を生み、土は金を生み、金は水を生み、水は木を生みます。これが陽の関係です。木は土を滅ぼし、土は水を滅ぼし、水は火を滅ぼし、火は金を滅ぼし、金は木を滅ぼします。これが陰の関係です。これらの相性を考慮したうえで、5つを絶妙なバランスで組み合わせることにより、創造されるもの、付与される力が決定されます。はい。そこで、すべての属性をいつでもバランスよく使うことができればよいのですが、実際にはそうはいきません。人には生まれつき持った属性があり、

それにより属性の優劣が決まるのです。はい。例えば、ここに生まれつき土の属性を持つ人がいたとしましょう。その人にとって一番優等なアールの属性はもちろん土です。では、次に優等なアールは何でしょう。」

「金」

既に退屈してきたのだろうか、生徒たちがだらだらした声で答える。

「はい、そうですね。土は金を生むことから、土の属性の人にとって金のアールも優等といえます。では、次に優等なアールは何でしょう。はい、みなさんもうわかつているでしょうから、私が答えます。次は火ですね。火は土を生み出す。土の属性の背後には、必ず火の属性があるということですね。そして次は水。その次は木となります。一番劣等な木のアールは、ほとんど使うことができないと言っていていいでしょう。はい。・・・さて、アールについての基本的な事項の復習はここまでにして、そろそろボル准将がお見えになる頃でしょう。はい、それではみなさん、第一訓練場に速やかに移動してください。いいですね？」

「Yes Sir!!」

生徒たちは一斉に敬礼をすると、席を立ち教室から移動を開始した。

「ボル將軍はどんなお話をするんだろうね。やっぱり軍の話かな。」
エヴンが切り出した。

「知るか。俺はもう今のファビウス先生の話で満足だわ。帰りてえ。」

「
ディオンは廊下をツールと並んで歩きながら、面倒くさそうにつぶやく。」

それを見たエヴンは呆れ顔だ。

「まったく、ガキね。」

「まあ、俺たちやガキに違いないけど。」
「トールが頭の後ろで手を組みながらお気楽に答える。
「トール、あんたたちと一緒にしないでちょうだい。」
エヴンはパシントトールの背中を叩いた。

第一訓練場にはすでに多数の生徒たちが集まっていた。どうやらデイオンたちが最後のようだ。第一訓練場はアウクス軍事学校で一番大きい訓練場だ。土のフィールドをぐるっと囲むように観客席があり、さながらスタジアムのようだ。観客席の中央には来賓席があり、白髪の老人と軍人が3人座っている。

「生徒諸君、速やかに整列せよ。」
スピーカーから教官の声が響く。

全ての生徒たちが整列し終わると、来賓席に座っていた白髪の老人がゆっくりと立ち上がりマイクに向かった。

「えー、うん？マイク入ってるか？」
側近の者ができて、マイクのスイッチを入れる。

「このまましゃべればいいんだな？OK。・・・おほん。えー諸君、今日は国軍アールヴ司令部よりボル准将とその部下フリーン大尉、

アルヴィース大尉が見えている。高等部3年生は卒業も間近。そこで、卒業後軍に入る君たちに、実際の現場としての軍を知ってもらうべく、ボル將軍にきてもらった。最近は・・・」

「始まった、あいさつとは名ばかりのブーリ総長の長話・・・。」
「ツールがつぶやく。」

「だから、俺は嫌だったんだよ。これじゃあボル將軍の出る幕はないな。」

ディオオンもつぶやく。二人がひそひそと話をしていると、

「おじいちゃんはいつもいい話をしてる。まじめに聞かないから退屈するのよ。」

エヴンが眉をひそめながら言ってきた。

「悪かった、悪かったから怒んなよ。ほら、あそこに座ってんのがボル准将だろ？」

ツールが指を差す。ディオオンとエヴンもそちらに視線を向けた。

来賓席の一番左に茶髪の若い男性軍人、その右に金髪の若い女性軍人、その右に青い髪の若い男性軍人が座っている。この青い髪の男がボルのようだ。男は足を組みさらにその上に手を組み、下を向いて座っている。

「あの青い髪がボル將軍か？ けっ、あんな座り方してかっこうつけやがって。」

そう言うディオオンにエヴンが反論する。

「かっこうつけてんじゃなくて、かっこいいの！ 大人の男って感じ。もう少し上を向いてくださればお顔が見えるのに。」

「これからたっぶり見れると思うよ。総長の話、もうそろそろ終わりそうだから。」

再びツールが指を差す。

「えーということ、私の話はこれくらいにして、そろそろボル將軍に話していただく。ではボル君、よろしく頼む。」

ブーリの手の動きに合わせて、全員の視線が青い髪の男に注がれた。

第1章 始まりと日常（後書き）

かなり遅い更新となりました。申し訳ございません。

今回は用語が噴出しましたが、回を追うごとに理解していただければと思います。

ファビウス先生の台詞に「はい」が多いのはミスではありません。

彼の口癖です（笑）

プロローグと雰囲気が全然違うと感じられた方が多いと思いますが、いずれは回帰していくつもりですのでお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1222c/>

Rast Means

2010年11月6日01時39分発行